瘿雜考

森　鹿　三

本誌前號に伊水の上流地域には瘿卽ち甲狀腺腫を病む人の多いことを紹介したが、餘程皆の注目を惹いたと見えて他に瘿に關する記事はないかと質問を受けた。當時些か控へて置いたものもあるが、直接あの紀行と關係がなかつたから省略したのである。今その補說として瘿に就いて目に觸れた記事を書附ける。西征記にも「俗云水土所致。伊水不可飲也。」とある如く一種の地方病で飲料水と關係があるらしい。王安石の「汝瘿和王仲儀」といふ詩には「汝水出山險。汝民多病瘿」とあつて伊水に近い汝水の流域にもこの病氣のあることを知る。『小品方』には「長安及襄陽蠶人。其飲沙水喜病沙瘿」とあつて此等の地方にも風土病としての瘿があつたらしい。現在熱河省にはこの病があり土地の人は瘿なき者を外來者扱ひにするさうである。(『亞東畫』第二輯參看)わが臺灣の山地にもこの地方病があるといふ。

『釋名』に「瘿嬰也。在頸嬰喉也」とある如く頸下に垂れ下がるのであるが、その形に就いて面白い記事がある。『水經江水注』に「杜元凱之攻江陵也。城上人以瓠繫狗頸示之。元凱病瘿故也」とあつて丁度瓠を頸下に吊下げたやうな形である。因みに我國で瓠をフクベといひ瘤をフスベといふのはやはり形の類似からであらうか。王安石のさきの詩には瘿の形を「或如烏粻滿。或若猿嚥並」といつてゐる。共に物を含んだ姿である。瘿には地方病の外に憂悲し氣結ぶに由つて生ずるものもある。魏志賈逵傳に引く『魏略』に「逵前在弘農。與典農校尉爭公事。不得理。乃發憤生瘿」とあるのが史實に求めうる一例である。『小品方』によればこの方は瘿に核がないが、沙水を飲むためにできる方は核があつて根なくして浮動し皮中に在りといふ。或は瀰漫性甲狀腺腫と結節性甲狀腺腫の差であらうか。杜元凱卽ち杜預が瘿を患つたことは前述の如くであるが、この人に『春秋經傳集解』の著あることは周知のことであらう。しかるに賈逵—『春秋左氏解詁』の著者のそれに非ず—も亦『魏略』によれば「始逵爲諸生。略覽大義取其可用。最好春秋左傳。」とあつて、この處瘿と左傳とは因緣がありさうである。それは扨置き瘿を治すのには昆布が一番。昆布は支那には產せず『本草』にも東海に出づとか高麗に出づとか言つてゐる。そこで昆布はこぶを治すが故にこぶといふのであつてこの語が支那へ渡つて昆布となつたといふ。(服部宣『名言通』の說)ともかく瘿を治すに昆布や海藻の必要なことは『千金方』以下諸種の方書に見ゆる所である。